

第14回 コンクリート生産性向上検討協議会 議事要旨

1. 日時

令和7年2月26(水) 15:30～17:30

2. 場所

中央合同庁舎3号館11階特別会議室（WEB併用）

3. 議事

(1) これまでの主な議論について

(2) 規格の標準化・要素技術の一般化及び全体最適の検討

- 1) 各種ガイドラインのフォローアップ・改定案について
- 2) プレキャスト製品の適用検討（大型構造物への適用に向けたVFMの検討）
- 3) プレキャスト製品の導入促進のための検討（民間審査制度の活用）

(3) サプライチェーンマネジメント等の検討

- 1) 生コン情報の電子化について
- 2) 「生コンの情報の電子化」に向けた試行の実施 経過報告（一般社団法人 日本建設業連合会）
- 3) コンクリート工の品質管理・検査の省力化に向けたあり方検討

(4) 情報提供等

- 1) 中国地方整備局 プレキャスト導入促進に向けた検討
- 2) 九州地方整備局 プレキャスト製品採用の取組状況

4. 委員意見

◆ 各種ガイドラインのフォローアップ・改定案について

- ・ プレキャストの施工事例が増えており、事例を示すことで、設計段階でのプレキャストの採用検討をし易くなるのではないかと。
- ・ 現在はガイドラインが充実しており、採用しやすくなっている。ただし、各種ガイドラインで使われ方や採用方法が異なるため、活用の拡大に向けては別途通知文が必要と感じている。

◆ プレキャスト製品の適用検討

- ・ 生産性向上、担い手不足により、プレキャストが標準となり、プレキャストで施工できない部分を現場打ちで対応するようになっていくのではないかと。これまでのVFMの試行データで行政が戦略的に先導していく必要がある。
- ・ プレキャストの優位性として、暑中コンクリート打設における熱中症リスクの軽減、生コン工場が近くに無い現場での施工、LCCでの維持管理費の軽減が挙げられる。

- ・ 全体最適化の議題が挙げられてから 10 年程が経過しており、社会的な要請も変わってきている。現在は環境負荷低減が重要視されている中で、全体最適とした場合に現場打ちとプレキャスト、セメントの社会的役割、品質等はこの 10 年程で状況が異なってきている。
- ・ CO₂ 排出量の削減効果については、評価の範囲の設定が難しいため、過度に重きを置くことには留意が必要である。現在、様々な CO₂ 排出量削減の技術開発が行われており、生コン工場で対処できる部分もあるので、CO₂ 排出量の計算結果だけで効果を評価するのは、必ずしも現実的ではない。
- ・ VFM の評価指標は過年度の評価で算出しているが、担い手不足になる前の評価に相当する。将来的にはハードルが高くなり、却ってプレキャストが使いにくくなることも考えられ、継続的に改定していく必要がある。
- ・ VFM だけでは将来的に採用を増やすことは難しい。プレハブ化による大量生産や、大規模構造物ではロットを大きくすることが必要となる。型枠の回転率、稼働率を揃えないと利益が出ない。なお、プレハブ化を図っても工程短縮ができないとメリットがないので、継手構造について、より容易で確実な技術開発を進めるべきである。

◆ サプライチェーンマネジメント等の検討（生コン情報の電子化について）

- ・ スランプ検査の省略は良い方向性であると考えている。スランプは施工者側が管理する項目であり、コンクリートの価格を設定するための参考値の一つと位置付けてよい。
- ・ ただし、全て条件が同じ現場はないので、検査が難しい。配合表だけでなく品質証明書が必要である。
- ・ 品質証明は各生コンクリートの配合を伝票に示すことでよいのではないか。空気量などは練り上がってから現場到着までの間に数値が変動するので、それらを考慮した配合とする。必要以上の検査を発注側がやめることは生産性向上に繋がる。

以上